

信保は同盟にあたり

「修理大夫（朝興）殿は先代の嫡子・藤王丸殿の陣代と聞くが、それでは当方も心許ない。どうか、いつそ家督を奪うというのは？」

使者は顔色を変えた。

確かに扇谷上杉家は先代・朝良の死後、その後見として一族の朝興を据えた。

すべては藤王丸が成人するまでの陣代である。山内上杉家と同じ立場と行ってよい。

「難しい話ではあるまい。なんなら真里谷家が支援してもよい」

上杉家の使者は言葉を失った。それを畳み込むように、真里谷信保は囁り寄った。

「のう、これから小弓公方のもとで仲良くやっていく仲ではないか？」

「これは、当方の一存にて図れる話に非ず」

「されば、よく話されたし。我らは北条を討つために結ばれた同志である」

後日、このことを聞いた朝興は、以来、思案に更けるようになる。

この年の夏、真里谷信保は、正式に北条氏綱との関係を断交し、扇谷上杉氏との同盟を決した。

この頃の扇谷上杉氏は、とにかく北条氏を意識する外交を展開した。甲斐国の武田信虎と結んだのも、まさにこの年のことである。

真里谷氏との同盟は、引いては小弓公方の麾下になる。

これにより、〈古河公方―北条氏〉という図式に対し、〈小弓公方―扇谷上杉氏〉という対立構造が出来上がっていく。

この年の暮れ、扇谷上杉氏からの使者が真里谷城へ駆けつけた。

「上杉家など、もはや張り子の虎。しかし、腐っても鯛は鯛なり。存分にその名は使わせてもらうが得策」

小弓公方・足利義明は真里谷信保に支援を命じた。

軍勢が動き出したのは翌大永六年のことであ

る。

三月、扇谷上杉・真里谷連合軍は蕨城を攻め、これを陥落した。

「かたじけない、三河殿」

下手に出る扇谷上杉朝興に対し

「なんの、上杉殿の仰せともなれば、応じぬ訳にも参りませうまい」

真里谷信保の言葉は社交辞令だが、それに気をよくした朝興は

「この機を損なうことなく、北条方に塗り変わるうとしている武蔵・相模の各地を転戦するつもりなり。今後とも御助勢の程を小弓公方に」と進言した。

どこまで図々しいものか。真里谷信保は一瞬、嫌悪を覚えた。

一応、その旨は後日、足利義明の耳へと入れた。

「結構なことなり」

と笑う義明の言葉には邪気すら感じられ、よもや真里谷を消耗させるものかと訝しくなるような、どこかふてぶてしささえ、真里谷信保は感じていた。

この対立構造は、自然と、里見氏を組み込んでいくこととなる。

大永五年、長い間大火で焼失したままの石塔寺本堂の再建が成った。この再建に尽力したのは、在地支配する丸氏である。

朝夷郡は白浜城も抱える地域で、丸氏は安房里見氏の隆盛を支える存在であった。

「行基和尚以来の名刹を再興するは殊勝なり」里見義豊は再建して間もなく、石塔寺をお忍びで参詣した。

石塔寺は

「日本三天石塔寺」に数えられる天台宗の名刹だ。

その城砦のような縄張りのなかにあって、名刹の響きは、不思議なくらいに景観としくりしていた。

後年、この寺は石堂寺と改められる。

それは、この地に留まった足利石堂丸(頼氏)に肖ったと云われる。

頼氏は、のちの喜連川足利氏である。

石塔寺を参詣した義豊は、その足で白浜城へと赴いた。

外海(太平洋)の雄大な広さは、なんとも心地いい。同じ海でも、三浦半島を睨んでいるだけの箱庭の如きものと比べれば、天と地ほどの違いである。

(世俗とはまことに面倒よな。早く僕も(二統)を為して、ここで詩歌を愛でる自適な日々を過ごしたいものよ)

心の奥でつい、嘔み締めるしかない愚痴だ。

ここで休息ののち、杖珠院を詣でた。

ここは祖父・里見義実の菩提寺である。

本尊である地蔵菩薩に手を合わせても心が落ち着かないのは、父同様、在地豪族を重んじて(二統)を為さなかつた異種疎遠の一念だろうと、義豊は考えた。

(地蔵菩薩の御加護をと願い、天子様と相克の戦さを為された等持院(足利尊氏)公。若い頃からその信仰を厚くなされていたと、鎌倉の僧侶に聞いたことがある)

合理的に考える義豊は、神仏に対して冷めたところがある。普請は嫌いではないが、それは民衆のためであり信仰とは程遠い。

思えば、信心のために手を合わせたことなど、ご無沙汰ではあるまいか。

信仰とは依存に非ず。

思う儘にならぬことの心の折り合いに、人は信仰をする。そうであるなら、理解できる気もする。

(信仰とは、つまりはそういうことなのかも知れぬな……修羅、か)

義豊はこれまで戦さの陣頭に立ちながら、在地の顔色を立てる戦略に辟易していた。よく云えば、煽てた者勝ちなのだが、その気持は自分に対する嘘でしかない。

ようは、己の性根が真つ直ぐに過ぎるのだろ

う。

(むかしなら、美と好き勝手に話すことで発散したな)

一色九郎に嫁いだ美とは、それ以来会う機会もない。

白浜の波は、義豊の心に僅かな安らぎとなつて、寄せては返し、静かな騒めきを繰り返すのであった。
十十十

新たなる敵(3)

夢酔 藤山